

崇城大 起業家育成に力

「学生の県外流出に歯止め」

崇城大（熊本市）が、学生の起業支援に力を入れている。2014年度に授業や部活動を通じて起業に向けた力を養うプログラムを始めたほか、海外での起業を後押しするため、米国事務所を開設した。崇城大は「若者の県外流出に歯止めをかける一助にもしたい」と意気込んでいる。

（内田 遼）



新たなビジネスについて意見を交わす起業部員たち

「起業部」で商品開発を議論 世界を視野 米国事務所開設

「こんな見た目で売り上げが伸びるかな」
「僕らが面白いと思ったようにしないと」

昨年12月下旬、学内の一室で「起業部」の部員たちが議論を交わしていた。崇城大が14年度に始めた「起業家育成プログラム」には、経営理論などを学ぶ授業に加え、部活動も組み込まれている。

部員は約30人。「球磨焼酎で作るリキュール」、「手軽に野菜を育てる水耕栽培キット」など八つをテーマに議論を重ねる。その一つ、生物生命学部3年の堤和紀さん（22）らが提案する暗視用眼鏡「Moon Glass」の開発・販売は、昨年12月、経済産業省などが主催する学生対象の起業コンテストで入賞を果たした。

同学部3年の白石美嘉さん（20）は「多くの人と議論することで、経営上の課題

が必ず見つかる」と語る。

◇
昨年10月には、米サンフランシスコに起業支援を目的とした米国事務所を開設した。起業後の世界的なネットワーク作りにつなげる狙いもあるという。

事務所は中心街にある起業家向けのオフィスビルに入居。大学職員は常駐しないが、学生が起業家と交流したり、投資家に関する情報提供を受けたりすることが期待されるという。

◇
プログラム責任者の熊野正樹准教授（起業論）は「起業には、起業家同士のネットワークが欠かせない。これまで学生と現地を訪れても、見学に來たときしか受け止めてもらえなかった。現地事務所は『ネットワークに本気で入るんだ』という意思表示でもある」と意義を強調する。

◇
崇城大によると、昨春、学部を卒業して県内に就職した学生は27%にとどまった。近年は同程度の水準で推移しており、熊野准教授

も、「本当は熊本で就職したかった」と言いながら県外に出た卒業生を何人も見てきたという。

熊野准教授は「学生同士が切磋琢磨し、世界から刺激を受けることで、高い能力を持った起業家を育成したい。彼らが熊本でどんどん起業すれば、人材流出に歯止めをかけるきっかけになる」と話している。